



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	東京語「を」格ゼロマーク化の社会言語学的解釈 Sociolinguistic interpretation of zero-marking of o in Tokyo Japanese
Author(s)	松田謙次郎(Kenjirō Matsuda)
<i>Citation</i>	Shoin Literary Review, No31 : 49-64
Issue Date	1998
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

東京語「を」格ゼロマーク化の 社会言語学的解釈

松 田 謙次郎

1 はじめに

例文(1)―(4)に見るように、東京方言の対格格助詞「を」が、自然談話のなかで頻繁にゼロとして実現されることは一般に広く知られており、その先行研究も少なくない (Kuno 1973、Tamori 1977、Hinds 1982、Tsutsui 1984、Shibamoto 1985、Saito 1985、Masunaga 1988、Miyagawa 1989、Motohashi 1989、Hosaka et al. 1992、Matsuda 1992、1993b、1994、1995、1997a)¹。この現象を以下「ゼロマーク化」と呼び、ゼロとして実現された「を」のことを「ゼロ形」と呼ぶことにする。

(1) オバチャマとか、涙一 ϕ 流しちゃってんの。

[HS, YDF/9001-0-081]²

(2) もう本当にねえ、いろんなもの一 ϕ 捨てるのねえ。

[TC, OUF/9103-1-149]

(3) ファイバー一 ϕ 持って来んのはたいへんだし、時間もないから…

[NK, YUM/9024-0-297]

(4) 昼飯はたまに自分でお金一 ϕ 出して食べてね、っていうかんじで…

[KM, YUM/9025-0-612]

私見によればこの文法現象の東京における社会的分布とその解釈については、わずかに Shibamoto 1985と井上1982、Matsuda 1995があるのみと

思われる。うち、Shibamoto 1985は山の手地域のみをその考察の対象とした研究であり、しかも数量的研究としてはゼロマーク化の有力な説明変数として知られるスタイル差がコントロールされていないという欠点がある。井上1982は、国語研1989、1990の言語地図による考察である。そこでも述べられているように（井上1982：103）、他の日本語における共時的言語バリエーションの分析と同様（Hibiya 1988、Matsuda 1993a）、東京語「を」格ゼロマーク化の社会的分布の調査・解釈のためには、是非ともその発話スタイルによる変動を視野に含めた上で、自然談話データを基にした計量的アプローチを取ることが不可欠と思われる（Matsuda 1992、1993、1994、1995、1997a）。本稿はこのような問題意識から出発し、理論的に考えられる幾つかの可能性を実際のデータと照らし合わせて検討した上で、各々の問題点を指摘するものである。

2 データ・方法論

本稿で用いるデータは、都内37名の生え抜きの話者とのインタビューから得られた7,529件のサンプルからなる。話者選択については、表1に見るとおりであり、その性別・年齢・地域などの社会的属性による片寄りを極力減らすように配慮してある。インタビューの方法は、Labov 1984などに見られるような、スタイル的に幅をもった自然談話を収録することを目的

	老年		若年		計
	男	女	男	女	
下町	6	6	4	4	20
山の手	4	5	3	5	17
計	10	11	7	9	37

注 老年：40才以上／若年：39才以下

表1：サンプルの年齢・性・居住地による内訳

としたものを採用してあり、うち幾つかは親しい者同士の長時間にわたるグループでの会話を録音したもの（グループセッション）である。サンプルすべてについて、言語内的諸要因の他に、スタイル差、そして話者の性別・年齢・地域（山の手・下町）などの社会的変数についてコーディングを施してある。

言うまでもなく、ここでのデータは明示的に「を」が使われている場合と、それがゼロマーク化された場合2つからなる。「を」のゼロ形の場合には、それが「を」がゼロ化されたのか、「は」がゼロ化されたのかということで通常問題になる。つまり、目的語名詞句が主題化されさらにその「は」がゼロ化されたのか、それとも「を」のままゼロ化されたのかが必ずしも明確に区別できないということである（図1）。ここでは主として直観によりそれが「を」であったか否かを判断した。ちなみに、判断に苦しんだケースはすべて除いているが、実際には一人の話者につき数個以内であった。同様なことは、「が」との揺れについても言え、両者の混同から来る差異により、今回の報告内容が大きな変動を見せることはないものと思われる。なお言語内的要因については Matsuda1995、1996、1997a に詳細を述べてあり、また本稿の主旨ではないので、ここでは割愛する。

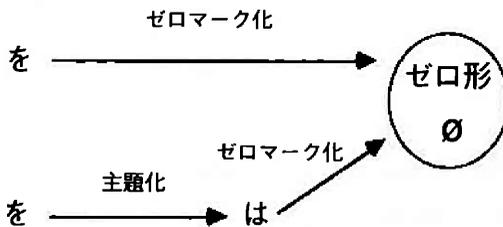
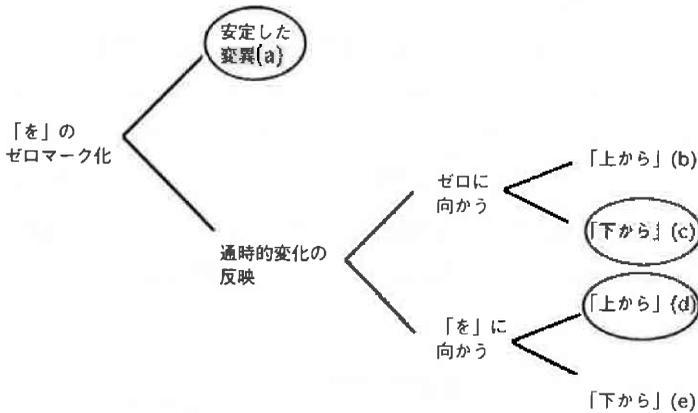


図1：「を」ゼロマーク化の曖昧性

3 東京方言の「を」：変化か、安定した変異か？

共時的体系内における変異現象は、必ずしも通時的な変化の反映とは限らない。また、仮にこの変異が変化だとしても、その言語共同体内におけ

る性格を見極める必要がある。つまり、東京方言における「を」格ゼロマーク化の動態には、まず大きく(1)変化の反映と(2)安定した共時的な揺れという二つの可能性が考えられる。変化という立場は、さらにそれがゼロ形へ向かうものなのか、それとも「を」格の表示を常に明示的なものにする方向へ向かうものなのかという、変化の方向による分類がなされる。これと並んで、言語変化にはその変化の社会言語学的性質からも分類が可能である。つまり威信形としてある言語形式が言語共同体に持ち込まれ、その意識的使用を通しての浸透という形をとる「上からの変化」と、内的な要因によって起こる無意識的な使用を通しての変化という形をとる「下から



- (a) ゼロ形は、何らの進行中の変化にも関与していない、方向を持たない変動である。
- (b) ゼロ形は増加の傾向にあり、その変化は「上からの変化」である。
- (c) ゼロ形は増加の傾向にあり、その変化は「下からの変化」である。
- (d) ゼロ形は日本語の歴史的変化の流れを継承しつつ減少の途上にあり、明示的な格表示に向かって緩慢なスピードで「上からの変化」を続けている。
- (e) ゼロ形は減少傾向にあるが、その変化は「下からの変化」である。

図2：「を」ゼロマーク化変異の5つの可能性

の変化」という、Labov 1966に始まる社会言語学的な区別である。すると、「を」格ゼロマーク化の変異をめぐるのは、変化が安定した変異かという区別、変化の方向、そしてその社会言語学的性質の3つの特徴により、論理的には図2に示すような5つの可能性が考えられそうである。

ところが、これはあくまで論理的可能性であり、これらの可能性がすべてありうるわけではない。以下に触れるように、明示的な「を」の表示は東京方言においては威信形と考えられるため、「上からの変化としてのゼロ形の増加」というのはつじつまがあわないことになる。「下からの変化としてのゼロ形の減少という」というのも同様である。組み合わせとして意味をなすのは、そうすると、「上からの変化としてのゼロ形の減少」と「下からの変化としてのゼロ形の増加」だということになり、結局楕円で囲んである(a)(c)(d)の3つの可能性を考えれば良いことになる。

いずれの仮説もありえそうな話であり、データなしでは解決のつけようがない。そこで、これらの可能性を検討する前に、まずここで使用するデータの分布を見てみよう。

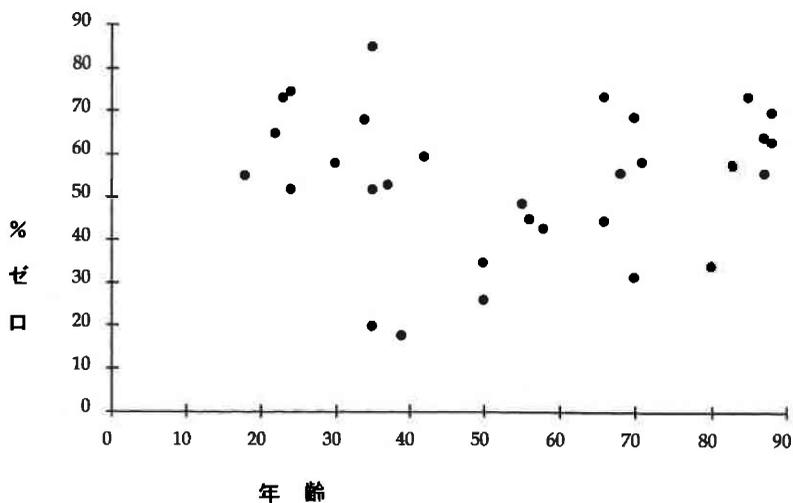
4 データ分析

この研究で使用した自然談話データから見られるゼロ形の特徴は、以下のようにまとめられる。

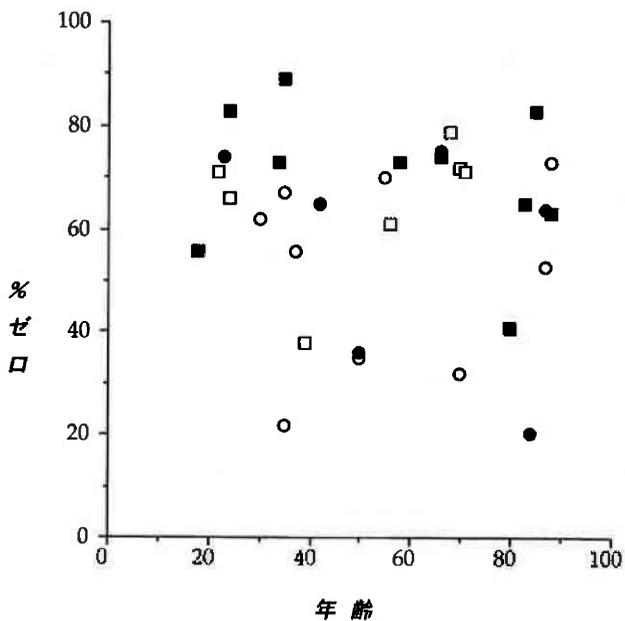
(i) ゼロ形の分布に年齢差(老/若)に有意差は見られない

グラフ1に見られるように、ゼロマーク化された「を」は、別に年齢によって多く使われるといった傾向は見られない。ピアソン相関係数を計算すると -0.028 ($p < 0.87$) という結果であり、全くの無相関であることが確かめられる。

グラフ1はすべての話者を含めた結果であるが、ではこれを話者の社会的諸属性(性別、居住地域)および発話スタイルによって分解して検討しても結果は同じであろうか。これが変わらないことを示したのが、グラフ



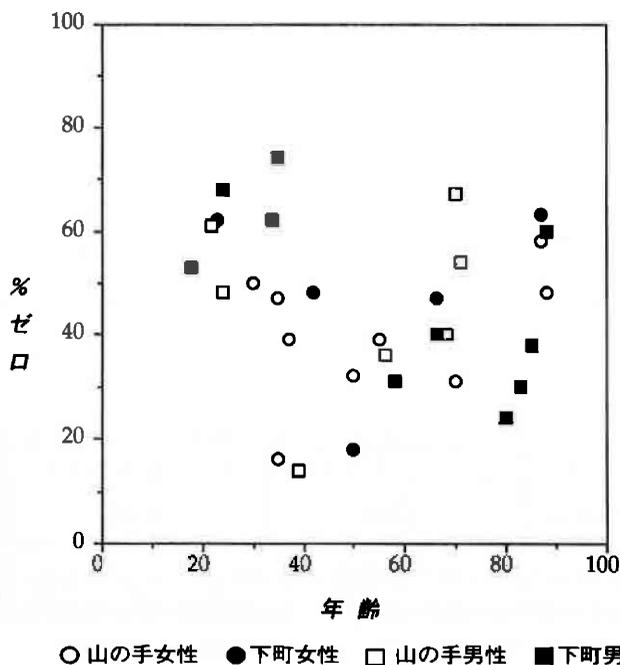
グラフ 1：ゼロ形の年齢による分布



○山の手女性 ●下町女性 □山の手男性 ■下町男性

グラフ 2：ゼロ形パーセンテージの性・年齢・居住地域による分布

(くだけたスタイル)



グラフ3：ゼロ形パーセンテージの性・年齢・居住地域による分布
(改まったスタイル)

2～3である。グラフ2にはくだけたスタイル、3には改まったスタイルでの各々4つの社会的グループのゼロ形パーセンテージがプロットされている。当然、一つのグラフあたりのサンプル数は少なくなるが、各グラフの中で各グループごとに傾向を追っても、これといったものは見い出せない。統計的にこのことを確かめるために、回帰係数の有効性をノンパラメトリックな方法で検定する Theil test (Hollander and Wolfe 1973: 201ff による)を用いたところ、すべてのグループについて有意差なしと出た(ここでは、回帰係数がゼロかどうかの検定をしている)。より細かなグループ分けをしたところで結果は変わらず、ゼロ形の分布は年齢差を示さないものである。

(ii) くだけた発話スタイルにおいて、より多くのゼロ形がみられる。

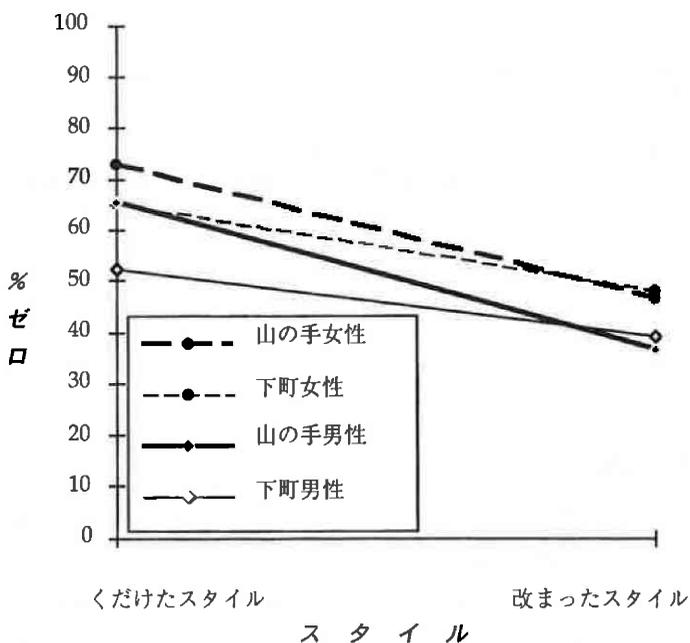
サンプル全体を Labov & Sankoff 1985 によって、くだけたスタイルと改まったスタイルに分類したところ、改まったスタイルでは41%のゼロ形、くだけたスタイルでは65%と、大きな差が検出された(表2)。ゼロ形の出現率へのスタイル差の関与については、Tamori 1977、Tsutsui 1984などに言及されているが、今回の調査はこれらを自然談話データで確認したことになる。

	改まったスタイル	くだけたスタイル
%ゼロ	41%	65%
総計=7,529 / カイ自乗値=408.019 (d.f. =1, p <0.001)		

表2：ゼロ形パーセンテージのスタイルによる差

(iii) 山の手の話者は下町の話者よりもスタイル差が大きい。

スタイル差は確かにすべての話者に見られるが、必ずしもすべての話者が同じくらいの程度でスタイル差を示すわけではない。この差は、主として下町/山の手間の差となって現われる。言い替えば、居住地域とスタイル差は交互作用を示すということである。グラフ4を見てみよう(ここでは、サンプル数の関係から平均ではなく中間値を各データポイントでの代表値としている事を断っておく)。山の手・下町各地域内では男女ほぼ平行した分布を呈しているが、「山の手」「下町」と地域をセットで比べると、グラフの傾きに差が見られ、山の手側が20%以上の差を示しているのに対して、下町側では10%程度の差しか見られない。ここからすると、山の手住民側の方が、スタイル差に関しては下町住民側よりもよりある意味で敏感なわけである。



グラフ4：ゼロ形パーセンテージの性・年齢・居住地域による分布
(中間値による計算)

(iv) 女性の方が男性よりもよりゼロ形をよく使う。

やはりグラフ4から分かることだが、地域に関わらず、ゼロ形をより多く使っているのが女性であることは注目すべきである。Shibamoto1985は、山の手調査に基づいて同様な結論に達しているが、今回の調査からは、これが山の手特有の現象ではなく、下町でも観察されるものであることが確認される。ちなみに男女に分けてカイ自乗値を計算するときわめて有意な結果が得られ、ゼロ形の社会的分布に性差が大きく関わっていることを物語っている(表3)。

上のスタイル差、また書き言葉においては一般にゼロ形が極端に少なくなることを考えてもわかる通り、少なくとも東京では明示的に「を」を示

	男	女
%ゼロ	52%	58%
総計=7,529 / カイ自乗値=30.786 (d.f. =1, p < 0.001)		

表3：ゼロ形パーセンテージの性差による分布

す形が威信形 (prestige form) であり、ゼロ形は非威信形と考えてよい。すると、女性が、ゼロ形については非威信形をより多く使うわけである。この点については、後にさらに詳しく述べることにする。

5 データ解釈

さて、これらの分布から先に述べた3つの解釈(a)(c)(d)を検討してみよう。まず解釈(a)では、確かに年齢による有意差が見られないというデータの所見からは納得が行くものであり、データの解釈としては最も素直なものである。言い替えれば、以前はともかく、現代の東京語の体系では対格格助詞「を」は何らの変化に参加していないということである。無論、文法変化、しかも格表示という文法の根幹に関わる変異という性質上、変化の速度が一時代の言語共同体内の年齢差では現われないほどの緩慢なスピードで進行していても不思議ではない。この点は、共時データのみから通時的傾向を推測することの限界を示しているとも言える。

ではここで、敢えて「を」の共時的ゆれがきわめて緩慢な通時的变化の反映としてみよう。その場合どのようなシナリオが考えられるであろうか。可能性は(c)(d)のいずれかである。まず始めに、ゼロ形が下からの変化によって増加しつつあるというシナリオを検討しよう。Miyagawa 1989、Motohashi 1989などでも示されているとおり、万葉期からの日本語の歴史を考えた場合、「を」格が明示的に示されてくるというのが、歴史的変化に沿った自然な流れである。それが逆にゼロ形が増えるといのであれば、考えられるケースは明示的な表示へのあゆみから一転して逆戻りの変化を始めているという解釈となろう。

では、ゼロ形が上からの変化によって現象しつつあるというシナリオはどうだろうか。先に挙げた井上1992では、すでにこれに沿った主張がなされている。データの特徴(ii)であげた、「くだけた発話スタイルにおいて、より多くのゼロ形がみられる」と言う所見もこのことを裏付けるものといえる。威信形である明示的な「を」が、改まったスタイルでよく使われるのは理にかなうからである。

しかしながらこの仮説にとって問題となる点が2点ある。一つは、すでに述べた、なぜ女性が非威信形を男よりもよく使うのかという問題である。一般に威信形に向かう変化の場合、女性が男性に先んじることは欧米の社会言語学的調査でも繰り返し確認されてきている。Labov 1990では、これが言語変異・変化の社会言語学的原則の一つに挙げられている (Principle Ia)。また日本でも同様な分布が報告されていることには注意する必要がある (真田・他1992: 20)。今回の結果は、このような立場と真っ向から対立するものとなっており、明示的な「を」が威信形であると説明がつかないことになる。当然ながら、この問題はたとえこの変異が変化でなく、安定した変異であってもままとわりつく問題であり、なぜ女性が非威信形を使うのかに関しては一貫した説明が必要である。一方「下からの変化」では、女性が往々にして innovator であることが知られており (Labov's Principle II)、ゼロ形の変異がゼロの増加に向かう下からの変化であるとすれば、この性の分布には合致することになる。

「上からの変化」とする解釈にとってのもう一つの問題は、言語的要因との絡みで、明示的な「を」が、主文よりも埋め込み文のなかでより多く使われるという事実である。Givón 1981、Hock 1986などで論ぜられているとおり、一般に埋め込み文は、進行中の変化に対して保守的な傾向を示す性質がある。現在のケースでは、ロジットモデルによる分析では、埋め込み文か否かという要因は0.1%レベルで有意であり、予測通り、埋め込み文でゼロ形が出にくいものとなっている。スタイル差の反映と言う説明もありえそうだが、スタイル差は別に要因としてコーディングを施してあり、そこで説明がつけられるはずであり、事実スタイル差では説明がつかない

ことは Matsuda 1997b で示されている。そこで、もしも変化がゼロ形の減少に向かうものであるとすれば、埋め込み文内には、むしろゼロ形が見い出されるべきである。実際は逆の傾向が見られることは説明を要するものであり、ここでもやはり変化がゼロ形の増加に向かうとした方がつじつまがあうのである。

6 結論

本論ではまず東京語「を」ゼロマーク化の社会的分布について、以下の4つの特徴をデータから抽出した：

- (i) ゼロ形の分布に年齢差（老/若）に有意差は見られない。
- (ii) くだけた発話スタイルにおいて、より多くのゼロ形がみられる。
- (iii) 山の手の話者は下町の話者よりもスタイル差が大きい。
- (iv) 女性の方が男性よりもよりゼロ形をよく使う。

「を」の変異から一番確からしい結論は、これが言語変異の反映ではないということである。すなわち、安定した変異 (stable variation) である。仮にそれが変化の反映とした場合、これまでに報告されている社会言語学的調査の知見と照らし合わせると、ゼロ形の増加に向かう「下からの変化」、ゼロ形の減少に向かう「上からの変化」のいずれもデータや過去の日本語の歴史と完全につじつまがあうものではない。明確な格表示へと向かってきた日本語の流れから逆行する流れをとりつつあるという「下からの変化」の解釈、そして威信形の広がりでありながら女性が非威信形を多用している「上からの変化」と、いずれもこれまでに知られている原則や前提の改編を余儀なくするものである。しかしながら、もしこの変異が変化の反映であれば、それは下からの変化でゼロ形の増加に向かうという変化のシナリオの方が蓋然性が高いことを見た。いずれにせよ、東京語の「を」をめぐるのは、さらに社会言語学的な位置付けに関する追求が必要であることは言うまでもない。

おわりに、今後の最大の課題として学歴差に触れておきたい。これまでの性差をめぐる議論でも触れられてきたように（たとえば上で触れた Labov 1990）、学歴差が表面的に性差として表われてきている可能性は慎重に検討する必要がある。よく知られているとおり（荻野1983）、東京において学歴差は地域差とも絡み合う属性であり、特に高年層においてこの傾向が著しく、下町の高年で高学歴の女性はきわめて探するのが難しい。教育という側面で、Fujii 1991では、「が」が主語のマーカーとして確立するにあって、明治期の言文一致の動きと国定教科書の果たした役割が論ぜられているが、「を」の流れについても同様なことが考えられよう。だとすれば、学歴をコントロールした調査・分析がぜひとも行われなくてはならないものと思われる。

¹本稿は、日本言語学会第112回大会（於麗澤大学）、および第11回社会言語学シンポジウム（於英国ウェールズ大学カーディフ校）において口頭発表されたものに基づいている。当日コメントを賜った方々に感謝申し上げたい。ただし、最終稿の責任は松田個人のみのものである。

²自然談話データの引用は、話者のイニシャル、年齢（Y＝若年/O＝老年）、居住地域（D＝下町/U＝山の手）、性別（F＝女性/M＝男性）、および録音テープの該当箇所を示してある。

参考文献

- Fujii, Noriko. 1991. *Historical discourse analysis : Grammatical subject in Japanese*. New York : Mouton de Gruyter.
- Givón, Talmy. 1979. *On understanding grammar*. Orland, FL : Academic Press.
- Hibiya, Junko. 1988. *A quantitative study of Tokyo Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania.
- Hinds, John. 1982. *Ellipsis in Japanese*. Carbondale : Linguistic

- Research.
- Hock, Hans H. 1988. *Principles of historical linguistics*. New York : Mouton de Gruyter.
- Hollander, Myles, and Douglas A. Wolfe. 1973. *Nonparametric statistical methods*. New York : John Wiley & Sons.
- Hosaka, Junko, Takezawa Toshiyuki, and Uratani Noriyoshi. 1992. Analyzing postposition drops in spoken Japanese. *The proceedings of the International Conference on Spoken Language Processing 1992*. 1251-1254.
- Labov, William, and Gillian Sankoff. 1985. *Variation Theory*. Ms.
- 井上史雄. 1982. 「社会言語学と方言文法」. 『日本語学』1992年5月臨時増刊号. 94-105.
- 国立国語研究所. 1989, 1990. 『方言文法全国地図』1-2巻. 大蔵省印刷局.
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of Japanese language*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Labov, William. 1966. *The social stratification of English in New York City*. Washington, D.C. : The Center for Applied Linguistics.
- . 1984. Field methods of the Project on Linguistic Change and Variation. In *Language in use*, edited by J. Baugh and J. Sherzer. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall. Pp. 28-53.
- . 1990. The intersection of sex and social class in the course of linguistic change. *Language Variation and Change*. 2(2) : 205-54.
- Masunaga, Kiyoko. 1988. Case deletion and discourse context. In *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, edited by W.J. Poser. Stanford : CSLI. Pp. 145-154.
- Matsuda, Kenjirō. 1992. A multivariate approach to accusative case marker deletion in Tōkyō Japanese. Paper read at Penn Colloquium in Linguistics 16, University of Pennsylvania.

- . 1993. Accusative case marker *o* deletion in Tōkyō Japanese. *Papers from the 28th Regional Meeting of Chicago Linguistics Society 1992. Vol. 1: The Main Session*. Chicago: Chicago Linguistic Society. Pp. 356-366.
- . 1994. Accusative case marker deletion in Tōkyō Japanese: A quantitative perspective. Paper read at the 68th Annual Meeting of Linguistic Society of America, Boston, MA
- . 1995. *Variable zero-marking of (o) in Tōkyō Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania. Published as IRCS Technical Report # 96-20 [available from <ftp://ftp.cis.upenn.edu/pub/ircs/tr/96-20part{1,2,3}>].
- . 1996. Variable zero-marking of the accusative case in Tōkyō Japanese. Paper read at the 70th Annual Meeting of Linguistic Society of America, San Diego, CA.
- . 1997a. Variable Zero-Marking of the Accusative Case in Tōkyō Japanese. 宇賀治他(編)『太田朗先生傘寿記念論文集』。東京：大修館。Pp. 912-925.
- . 1997b. On the conservatism of embedded clauses. Paper read at The XIII International Conference on Historical Linguistics, Düsseldorf, Germany, August 10-17 1997.
- Miyagawa, Shigeru. 1989. *Structure and case marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Motohashi, Tatsushi. 1989. *Case theory and the history of the Japanese language*. Doctoral Dissertation, University of Arizona.
- 荻野綱男. 1983. 「山の手と下町における敬語使用のちがひ」. 『言語研究』 84: 45-76.
- Saitō, Mamoru. 1985. *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. Doctoral Dissertation, MIT.
- 真田信治・渋谷勝巳・陣内正敬・杉戸清樹. 1992. 『社会言語学』。東京：

おうふう。

Shibamoto, Janet S. 1985. *Japanese women's language*. Orlando, FL : Academic Press.

Tamori, Ikuhiro. 1977. NP and particle deletion in Japanese discourse. *Southern California Occasional Papers in Linguistics* 5: 243-63.

Tsutsui, Michio. 1984. *Particle ellipses in Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.